

# 原爆文学研究会報

第三九号

原爆文学研究会 二〇一二年九月

箱庭の外へ 七歳で広島資料館を見た時の恐怖があとを引き、いい年になるまで「原爆」を避けて生きてきた。東海村の臨界事故以降心を入れ替えたものの、未だに箱庭の中に管理された「原爆」しか知らないなと思うことがよくある。

今年の夏は、幸い原爆文学研究会の後三日ほど広島に滞在し、箱庭の外をのぞく機会に恵まれた。中でも似島の印象は強烈だった。軍の検疫所があったという広島沖の小島には、原爆の直後、一人も重傷者や死者が送られたという。人々は検疫所に入りきらずに炎天下に並べられ、遺体になってからも人の火葬場では間に合わず、馬匹焼却炉で焼かれ、あるいは土葬されたと聞いた。当時の馬匹検疫所の跡に建てられた似島中学校では、グラウンドから多くの遺骨が発見されたことがある。グラウンド脇には、海に向かって慰霊碑が建つ。

だがそれ以上に切ない思いを抱いたのは、当時の第二検疫所跡に建つ養護老人ホームを見た時だ。建物は瀟洒な鉄筋づくりで、カーテンの向こうからは明るい笑い声が聞こえてきたのだから、私の思いはお門違いなのかも知れないが、原爆犠牲者慰霊観音や平和地藏尊に接するこのホームを眼にした時、私は思わず芥川の「羅生門」を思い出した。引き取り手のない死者たちを、あの小説の都人は羅生門の楼上に持ってきて捨てた。原爆の日も、広島の周縁のこの島に重傷者や死者が連れてこられ、今も年老いた人がここに暮らす。なお、第一検疫所の跡には、戦後、原爆孤児のために似島学園が造られたが、この学園は今も、様々な事情を抱えた少年少女のための全寮制学園として機能している。

見たくないものを周縁においやることで、安全な箱庭はできたのだろう。そうすることで、私たちはむやみに忙しい日常生活を耐えていけるのであるけれど、箱庭だけを手軽に消費する軽薄さに、時に自ら嫌気がさす。

原爆文学にも箱庭化傾向があり、泣いてさっぱり忘れられるようなものが増えた。そんな中、ワークショップで北米文学の中に確実に核の痛みが記述されていることを知って、心強かった。箱庭の外に向かう力を、これからも研究会から得たいと思う。

(篠崎美生子)

## 第三九回 原爆文学研究会報告

二〇一二年七月七日(土)、八日(日)に第三九回研究会を開催しました。一日目は三名の研究発表がありました。齋藤氏の発表に対しては「この時期の長崎の英語教育を担ったのはアメリカの宣教師だが、広島はどうなのか」、「戦後の法と裁きのコンテ

クストの中に碑文論争を置いてみるとどうなのか」等の質疑があり、宇野田氏の発表に対しては「サークル運動の二つの波をどうとらえるか」、「われらの詩」というときの「われら」は地政学的にはどれほどの射程があったのか」等の質疑があり、小沢氏の発表に対しては、「大石氏がいま人類史的なスパンで語るのはなぜか」、「年表を増補していく運動に一つの思想があるのではないか」等の質疑がありました。二日目はワークショップを行いました。



◇ 研究発表1

# 原爆死没者慰霊碑文の英訳について

— グローバリゼーション下の想像力

齋藤 一

本発表の目的の一つは、二〇一二年五月二六日に専修大学生田キャンパスにおいて開催された、日本文学会第84回大会シンポジウム第四部門「ことばと共同体—グローバリゼーション下の想像力」における私の発表、「核時代の想像力と英文学」（広島原爆慰霊碑文論争に注目し、特に碑文を作成した英文学者雑賀忠義の戦中戦後の発言、そして碑文（の英訳）とアメリカの存在について問題提起を試みたもの）についてのシンポジウム参加者との応答について、本研究会会員に報告することであった。

私の発表は日本文学会のシンポとしては異色のテーマであり、まずは問題の所在を説明することに時間を取られたこともあり、議論を深めることはできなかった。それでもフロアからは有益な質問もあり、例えば、雑賀による英訳の揺れに、個別の事象にこだわるか、普遍的な立場を求めるといふ二つの立場の対立あるいは交渉を読み取ることが出来るのではないかという指摘があった。

本発表のもう一つの目的は、五月二三日の日本文学会シンポ以降に調査した成果について発表することであった。このシンポではすでに先行研究があるテーマを選び、問題の所在を聴衆にアピールすることが目的であったため、私自身の研究成果を発表することはかなわなかった。そこで、私はシンポジウム終了後に、日本における英米文学英語学の動向を知るためには必読の雑誌『英語青年』を一九四五年から一九五五年頃まで読み、「原子爆弾」「水素爆弾」「広島」「長崎」というキーワードを含む記事をデータベース化することで、日本の英米文学英語学者が「核」に対してどのように発言したのか、あるいはしなかったのかを検

証する基礎作業を開始した。「核時代初期（一九四五年～五〇年）の『英語青年』——原子爆弾・広島・長崎関連記事リスト」がその成果である（活字化する予定である）。現在作成中であるが、七月七日の時点で気がついたことを指摘しておけば、（1）広島の高専教育機関の動向はかなり掲載されているが、他方長崎関連の記事はほとんどない（「英米文学科」を有する文理科大学の存在の有無が関係している可能性がある）、（2）原爆投下の当事者であるアメリカを批判した記事は（予想できることであるが）ほとんど見当たらない、（3）広島市の高等教育機関によるシエクスピア劇（男女学生合同の『ロミオとジュリエット』）の開催など、英米圏の言語や文化を受け入れるための試みは積極的に紹介している、といったことである。

なお、（2）については、「英語クラブ “The Bomb That Fell on America”」【『英語青年』95巻9号（一九四九年六月）——Herman Hagedorn, “The Bomb That Fell on America”を「戦後文学の最も注目すべき作品の一つとしてNew York Times 其の他に紹介された」と報じる記事——のような例外はある。今後もこの作業を継続しつつ、さらに一九四八年頃から広島文理科大学を中心として発刊された雑誌 English や Ura についても調査を開始し、「原子爆弾」や「核」といった事態に対して英米文学英語学者はどのような言葉を紡いでいたのかを学んでいきたい。

◇ 研究発表2

## 被爆地広島のカークル詩誌 『われらの詩』と峠三吉

宇野田 尚哉

本報告では、被爆地広島のカークル詩誌『われらの詩』（一九四九年一月～一九五三年一月）とその中心的存在だった詩人峠三吉（一九一七

年二月（一九五三年三月）を取り上げ、とくに前者が戦後のサークル運動のなかで占めていた位置や、その性格、意義などについて論じた。

まず指摘したのは、『われらの詩』は、(1)戦後のサークル運動の二つの波（一九四九年までと一九五三年から）の谷間に位置すると同時に、戦後の平和運動の最初の高揚期に対応するサークル誌であったこと、(2)戦後広島島の文化運動を継承すると同時に、全国的なサークル・ネットワークの形成を志向するサークル誌でもあったこと、そして、(3)広島県下に多数の支部を設けるといふ『われらの詩』の拡大方針は功罪相半ばする結果に終わったこと、などである。

そのうえで、『われらの詩』の立場と活動について、そのピークと言わべき第八号とその前後の号に主として注目しながら論じた。その際に指摘したのは、『われらの詩』は、(平和勢力（ソ連・新中国・北朝鮮）対 戦争挑発者（アメリカとその傀儡の吉田政権・李承晩政権）) という認識枠組に立つてプロレタリア国際主義の立場から朝鮮戦争前後の時局に介入しようとしたサークル誌であり、たとえばそこで言われる「平和」もそのことを踏まえて解釈される必要がある、といった点である。

先行研究においては、「峙ら共産党系の活動家たちの運動そのものは孤立して、民衆に訴える力はなかった」（藤原修「ヒバクシャの世紀」と評価されており、いま述べたことを踏まえるならこの評価にも一定の妥当性はあると言えるが、しかし、占領下／朝鮮戦争下にあつて被爆体験に関わる表現をすることがきわめて困難ななかでなされた『われらの詩』の表現活動の射程は、その政治的命運とは別に、あらためて考察される必要がある。本報告では、そのような考察の必要性と可能性を示し、今後なされるべき研究の展望を開いた。

#### ◇ 研究発表3

### 大石又七の表現

——核と向き合う戦後思想のひとつの可能性として

小沢 節子

第五福竜丸の乗組員・大石又七（一九三四～）は、一九五四年三月、太平洋上で米国の水爆実験に遭遇し被爆した。八〇年代半ばに沈黙を破って体験を語りはじめ、九〇年代からは『ピキニ事件の真実』をはじめとする著作で、同事件の「決着」をめぐる歴史を追究、精力的な講演活動と個人としての発言をつづける。その批判的眼差しは核兵器廃絶のみならず、日米両政府の核戦略、原発問題にまで及ぶ。

報告では、彼の表現を個的な体験から出発し、普遍性・一般性への通路を見いだしていく大衆的思想としてとらえ、特に(1)書き言葉以前の模型船の手づくりなど、モノ・身体性を媒介とする表現、(2)NHKデイレクターとの出会いによる書き言葉の獲得、(3)死生観の変化、(4)各著作と自筆年表の上書きにみる歴史認識などを分析した。

一四歳で漁師となった大石は、自らが巻き込まれた出来事の意味を理解するために、学校教育や本によってではなく、テレビ（報道番組）を熱心に視聴し、専門家に教えを請うことで知識を広げ、歴史の「真実」を追い求めた。だが、メタヒストリー的な問いに答えはなく、「事実」が次々と明らかになるにつれ、体験の意味も変化した。それはとりもなおさず、体験へと何度も立ち戻り（過酷な記憶に何度も引き戻され）、歴史／世界史の中に自らを位置づける往復作業でもあった。こうした経験を経て、彼は日本政府からも国民・原水禁運動からも忘却された水爆被害者Ⅱ「被爆者」という主体を立ち上げ、自分には（死んでいった）口を開くことのできない仲間を代わって、体験を語りつづける「責任」があ

るといふ当事者認識に至る。

大石の体験の核心には、二〇歳の若者として味わった死の恐怖や差別、第一子の奇形と死産といった言語化されることのない「私の苦しみ」が存在するが、家族を含む他者との関係性を(再)構築し、自らを開いていく資質もまた、彼の思想を特徴づける。体験の強度故の苦しみの感受から生まれる思想は、戦争／原爆体験等をふまえた戦後大衆思想のひとつの可能性を示唆している。

◇ワークショップ「北米文学における核の表象について」報告③

## Nuclearism and Post-War American Culture (ニュークリアリズムとアメリカの戦後文化)

Michael Gormann マイケル・ゴーマン

Convinced that few Americans have considered "the terrible implications" and "incredible destructive power" of the atomic bomb dropped on Hiroshima, editors of The New Yorker devoted the entire magazine issue of August 31, 1946 to a piece by John Hersey entitled "A Reporter at Large: Hiroshima" ("To Our Readers" 15). Later that year, Alfred A. Knopf published Hersey's account in book form by its subtitle, Hiroshima, the title by which readers around the world know it today. Publication of Hiroshima marks the beginning of nuclear literature in the United States, and its concern with the aftermath of the atomic bombing of Hiroshima remains a common topic in nuclear texts of all forms, from essays to fiction to documentary films. Three other common themes in nuclear literature and film include Nuclear Attack/Apocalypse, Nuclear Anxiety, and Nuclearism and the Environment. As this presentation makes clear, these four motifs continue to inform and inspire

American books, films, and works in other media like video games.

(一九四六年八月三十一日、広島に投下された原爆の「恐ろしい影響」と「驚異的な破壊力」について考慮するアメリカ人がほとんどいないことを確信したニューヨーカー誌の編集者は、全紙面を割いてジョン・ハーシーの「A Reporter at Large: Hiroshima」を掲載した。同年、アルフレッド・A・クノッフはハーシーの記事に、もともと副題であり、いまでは世界中の読者によく知られることとなった『Hiroshima』というタイトルを付けて出版した。『Hiroshima』の出版は、アメリカにおける核文学の誕生を意味する。同時に『Hiroshima』が示した広島に投下された原爆の余波に対する関心は、エッセイからフィクション、ドキュメンタリーに至る全ての形式の核文学なかで、現在でも共通したテーマとして残っている。核文学・映画に共通したテーマは他にも、「核攻撃・アポカリプス」「核の不安」「ニュークリアリズムと環境」の三つが挙げられる。本報告では、これら四つのモチーフが、アメリカにおける文学作品や映画、そしてビデオゲームといったメディアなどを特徴づけ、影響を与え続けていることを明らかにした。)

◇ワークショップ「北米文学における核の表象について」報告②

## 核をめぐるアメリカ南西部の文学

——サイモン・J・オーティーズの詩を中心に

松永京子

一九四五年七月十六日、ニューメキシコ州のホワイトサンズ・ミサイル実験場で世界初の核実験が行われた。その後、アメリカ南西部では何十年にもわたって、プエブロ族やナバホ族などの先住民たちが、ウラム山や製錬場で働いた経験を持つアコマ・プエブロ族出身のサイモン・

J・オーティーズによる詩集『フアイトバック』（一九八〇）に収録された詩を中心に、アメリカ南西部における核の植民地主義の問題に注目し、オーティーズの詩がいかに〈核のアポカリプス〉の概念を転覆しようと試みているかについて考察した。

冷戦時代、〈核戦争が終末をもたらす〉というシナリオは、核軍事や核産業がアメリカ南西部の先住民の土地やコミュニティにもたらしてきた破壊的現状を不可視化する危険性を孕んできた。一方で、北米における「新大陸発見」以降の植民地主義政策は、先住民族を〈消えゆくアメリカ人〉とみなし、先住民文化を抹消することを目的としてきた。オーティーズは、このような北米植民地化の歴史を、アメリカ南西部の歴史に置き換え、核による侵略を植民地主義政策の一環として捉え直そうとしている。例えば、詩編「最下坑からはじめる」では、ウラニウム鉱山の最下坑で働くラグーナやアコマの先住民たちが、常に社会の底辺に置かれてきた現実が映し出され、〈核の植民地化〉が先住民の生活や文化にもたらしてきた破壊的影響力が露呈されている。

だがオーティーズは、核による終末論的想像力に対抗する〈サバイバルのナラティヴ〉を提示することも忘れない。詩編「私のいたいこと」のなかでオーティーズは、人種を超えた労働者の連帯、そして〈語る〉という行為そのものが、核による植民地主義を転覆する力を秘めていることを示した。

終末論的想像力が〈核のアポカリプス〉や〈消えゆくアメリカ人〉のレトリックを助長する一方で、生き残ってきた人々は、このようなシナリオが自分たちに当てはまらないことを繰り返して証明してきた。オーティーズの詩は、まさにこのような証明の一つであるといえるだろう。

◇ ワークショップ「北米文学における核の表象について」報告3

## 日系カナダ人作家 Joy Kogawa の作品 における「原爆」

松尾 直美

Joy Kogawa の *Obasan* (1981) は、Kogawa の自伝的要素を含ませながら、第二次世界大戦中のカナダにおける日系カナダ人の強制収容や立ち退きを主に描き、日系三世カナダ人の Megumi Naomi Nakane の視点を中心に展開していく。*Obasan* における戦争や強制収容は、Naomi の視点だけでなく、Naomi の周囲の「オバサン」たち、つまり女性たちの声や姿など様々な方向から描かれ、それを辿ると日系カナダ人の周縁性や人種差別などの強制収容に至った根源的な諸問題に至る。さらに、冒頭から作品全体を覆うある謎の結末として原爆が用いられる。発表では、なぜ強制収容をテーマにした作品の中に「原爆」の問題が用いられたのか、その意図を段階的に考察していくことを目的とした。

はじめに Naomi の母宛の手紙の形式をとった Emily おばさんの日記が、日系カナダ人の「集団の記憶」を蘇らせ、日系カナダ人の周縁化された立場、つまり「被害者」としての立場を強調していることを明らかにした。またそれに対する主人公 Naomi の嫌悪感について分析した。

一方で、Naomi も家族の写真から蘇る自身の強制移住の記憶から人種差別や女性への性的暴力を示唆する夢へと戦争についての本質的思考に至っていく。被害者としての立場を強調することを嫌悪しつつも、写真が、周縁化された立場の「集団の記憶」と「家族の記憶」の両側面から「戦争」を見直す役割を果たし、Naomi の失われた記憶を呼び戻す装置としての二つの重要な機能を持つことに注目した。

そして原爆というテーマが、主人公が長年抱いていた謎を解き明かすカギとなることで、作品自体が「戦争とは何か」、「加害者とは、被害者

とは何か(誰か)」という大きな問題を主人公 Naomi や読者に問いかけていくことになり、単なる自伝的な強制収容物語に終わらないことがわかる。それは Naomi 自身の曖昧な戦争の記憶を蘇らせ、「過去」と直面し、自己を取り戻す過程と連結していくことを結論とした。

最後にワークショップのオーガナイザーの高野吾朗氏、同ワークショップの報告者である Michael Gorman 氏、松永京子氏、そして示唆に富む活発な質疑応答、意見をくださったフロアの皆様に深く感謝申し上げます。

## 彙報

### 第三九回 原爆文学研究会

○日時 二〇二二年七月七日(土) 一三時より/八日(日) 九時一〇分より

○会場 広島大学東千田キャンパスL404教室

○研究発表(二日目)

発表1 原爆死没者慰霊碑文の英訳について

——グローバリゼーション下の想像力

齋藤 一

発表2 被爆地広島のカール詩誌『われらの詩』と

峠三吉

宇野田 尚哉

発表3 大石又七の表現——核と向き合う戦後思想の

ひとつの可能性として

小沢 節子

○ワークショップ「北米文学における核の表象について」(二日目)

報告1 Nuclearism and Post-War American Culture

マイケル・ゴーマン

報告2 核をめぐるアメリカ南西部の文学——サイモン・J・オーティーズの詩を中心に

松永 京子

報告3 日系カナダ人作家 Joy Kogawa の作品における

「原爆」

松尾 直美

コメント

高野 吾朗

全体討論

(コーディネーター

高野吾朗)

## 機関誌「原爆文学研究」第一号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」第一号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書式 縦書き、二九字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇二二年一〇月中旬、データファイル(Wordか太郎)を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室

## 編集後記

今号から会報の担当になりました。原稿を九州、関西、関東、国外から集め、北九州で編集し、福岡で発行しています。いままでのレイアウトを踏襲していますが、これから少しずつ新しいカラーを出していきたいと思えます。よろしく願います。なお、ワークショップについては次号の「原爆文学研究」で特集を組む予定です。(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一四一〇一八〇 福岡市城南区七隈八一一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) /e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>